

文法の手続き的知識をどう測るか

How to Test Procedural Knowledge of Grammar

根岸雅史

Masashi NEGISHI

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

村越亮治

Ryoji MURAKOSHI

神奈川県立国際言語文化アカデミア

Kanagawa Prefectural Institute of Language and Culture Studies

Abstract

It may have been naïvely believed by many of language teachers that grammar tests assess language learners' grammatical knowledge. Studies in second language acquisition, however, provide us with a new perspective on the concepts of grammatical knowledge. They suggest that we distinguish declarative knowledge from procedural knowledge. A high score in a conventional grammar test which assesses only declarative knowledge does not necessarily indicate the test-taker's ability to use this grammar correctly. The present study examines the effectiveness of a new type of grammar test, which enables procedural knowledge of English grammar to be assessed. The test in this study consists of two parts: the test of nonformulaic grammar use and that of formulaic grammar use. The item difficulties calculated based on item response theory show that most of the formulaic test items were easier than the nonformulaic ones. The results of the test items correspond quite well with the use of the grammar items in free writing assignment preceding. In spite of several challenges, the potential usefulness of the new test, which could predict procedural knowledge of grammar, was confirmed.

Keywords

Grammar Test, Procedural Knowledge, Declarative Knowledge,
Formulaic Language, English Profile

1. 「文法力」と「文法テスト」が測ってきた力

文法テストは、何を測るのか。この問いへの答えは、多くの英語教師にとっては自明だ。文法テストは、文法力を測る。しかし、その「文法力」とは何であろうか。

第二言語習得研究では、「文法知識」に関して、「暗示的知識(implicit knowledge)」対「明示的知識(explicit knowledge)」、「手続き的知識(procedural knowledge)」対「宣言的知識(declarative knowledge)」というような二分法がしばしば用いられるようになった。この区分は、SLA 研究においては、情報処理モデルの中で語られている。Lightbown and Spada (2013)によれば、DeKeyser (2001, 2007)らは、第二言語習得を「スキル学習」になぞらえ、言語学習も、他の学習と同様、「宣言的知識」、つまり、文法規則などの、持っていることを意識している知識から始まるが、練習とともに、宣言的知識は「手続き的知識」、つまり、その知識を使える能力に変わっていき、練習を継続することで、手続き的知識は自動化され、学習者は宣言的知識として学習したことを忘れるとしている。

こうした枠組みで、「文法力」を見てみると、従来の文法テストは、「文法力」の限られた側面、つまり、「宣言的知識」しか測定してこなかったのではないと思われる(根岸, 2011)。だとすると、従来の文法テストは、学習者がその文法項目を実際に使えるかどうかについては、情報を提供できていないということになる。従来の文法テストの意義と役割を認めつつも、実際の言語使用の能力の有無をできるだけ忠実に反映するような新しいタイプの文法テストの開発が求められる。

英語に関して、言語使用の実態を解明しようとしている研究プログラムとして、English Profile Programme (EPP)がある。EPPでは、特定言語への言及のないCEFRの利用に当たり、個別言語である英語のReference Level Descriptionsを明らかにすることを目指している。EPPはCambridge Englishが中心となって進めているが、それぞれのCEFRレベルの学習者の基準特性の概要を同定してきた(Hawkins & Buttery, 2009; Salamoura & Saville, 2009, 2010)。なお、EPPは、文法の他に、語彙や機能の習得についても調査を行っている。

EPPに関連して、根岸・村越は日本人英語学習者の文法項目の習得状況を、作文データをもとに調査してきている(根岸, 2012; 村越, 2012, 2013)。これらの調査からわかってきたことは、ほとんどの文法項目が「学習」から「使用」までにかかりの時間がかかっているということである。例えば、日本の中学で指導することになっている文法項目である「受動態」や「関係代名詞」などは、日本人英語学習者は作文ではなかなか使用してこないことがわかっている。多くの文法項目が、中学で学習したものは、中学では使用まではいかず、高校まで持ち越され、高校で学習したものは、大学まで持ち越されている。これらは、学習者の作文データでの使用状況に基づくものであるから、使用を強制されたものではない。したがって、これらの学習者が、調べた文法項目を「使おうとしても使えない」のか「使おうと思えば使える」のかは、EPP同様わからない。「使おうと思えば使える」のに使わないとすれば、それは使う自信がなかったり、使うのが面倒だったり、使う必然性がなかったという可能性がある。

これらの先行研究を勘案すると、教室における、外国語としての英語の習得のステージは、およそ次のような4つが考えられるだろう。

第1ステージ	使用(－)	宣言的知識(－)
第2ステージ	使用(－)	宣言的知識(+)
第3ステージ	使用(+)	意識的使用(+)
第4ステージ	使用(+)	意識的使用(－)

つまり、はじめは、宣言的知識もなく、それゆえ使用もない状態であるが(第1ステージ)、教室内で、ある文法を学習すると宣言的知識を獲得することになる(第2ステージ)。しかし、この段階では、多くの場合、すぐにはこの知識を実際に使うことはできない。そして、次の第3ステージになると、学んだ文法規則を使うことを意識すれば、使えるようになる。最後に、何度も練習したり、実際に意識的に使ってみたりということを繰り返すうちに、その知識が無意識に使えるようになる(第4ステージ)。従来の文法テストは、第1ステージと第2ステージの区別は可能であったが、第3ステージの能力は評価してこなかったという可能性が高い。なお、第4ステージの状態にあるかどうかは、実際に産出された音声言語や文字言語を見ることで判断することになるだろう。こう考えてくると、文法テストとして欠落していたのは、第3ステージへの到達の有無を見ることのできるテストである。

2. 新しい文法テスト開発の経緯

根岸科研(平成24年度～平成27年度、基盤研究(B)、課題番号24320103、「コーパス準拠の英語力レベル基準特性を活用した新しい言語テストの構築」)では、文法使用能力の有無を見るための文法テストの開発を試みている。根岸(2012)では、CEFR 基準特性に基づくチェックリスト方式による英作文の採点可能性を模索した。この調査では、英作文の中に現れる基準特性の困難度の推定は、多くの項目で可能であったものの、ここから導かれる能力値と人間の採点者による作文の採点結果との相関は、ゆるやかなものであった。チェックリスト方式の最大の難点は、その作文で使ってこなかった文法項目が本当に習得されていないのかわからないという点であった。

こうした問題点を克服するために、基準特性が最も多く現れた作文の朗読を収録し、それを受験者に2回聞かせてなるべく忠実に再現させ、そこでの基準特性の再現の有無を見るという方法をとった。しかし、この方法では、モデル文の朗読の中で、ターゲットとなる文法項目が出てきてしまうために、多くの受験者がそれらを使ってしまった。

この段階までの研究で明らかになったことは、意識せずに実際使うのかわかるを知るには、作文や発話の中の文法項目の出現を見ることになるが、新文法テストでは、どのような文法項目を使うべきかを学習者自身が判断して使えるかを知ることができる必要があるということだ。そのために、根岸(2011)や『特定の課題に関する調査(英語:「書くこと」)』(国立教育政策研究所, 2012)(以下、『特定の課題』)の問題(下記参照)などをもとに、学習者が自ら場面・状況を判断して、適切な言語使用ができるかを見る文法問題の開発を試みた。

(MaryとBeckyはKimと待ち合わせをします。)

Mary: Hi, Kim!

Kim: Hi, Mary! Where is Becky?

Mary: She is over there. She _____ on the phone.

(talk)

—『特定の課題に関する調査(英語:「書くこと」)』問題 A-5

その結果作成されたのは、文脈と使用する語(句)が示された下線部を含む文が示され、下線部を完成させる問題である。語(句)を2ユニット指定した項目(副詞節表現や関係詞などの項目)もあったが、それらの項目では、後置修飾部や関係詞節内のみではなく、それぞれ主節－従属節、先行詞－関係詞節などの意味のかたまりとして産出できるかどうかを見ている。これは、どういう形式を用いたらよいかが既定されている従来型の文法問題(『特定の課題』では、このタイプを「形式既定型」と呼んでいる)とは、大きく異なる。

このタイプの問題は、『特定の課題』では「形式判断型」と呼ばれているが、本稿では、文法知識の有り様に応じて、「手続き的知識テスト(procedural knowledge test, 略して PK-Test)」と呼び、従来の文法テストは「宣言的知識テスト(declarative knowledge test, 略して DK-Test)」と呼ぶことにする。したがって、PK-Testの開発に当たっては、特定の文法項目使用が自然に求められる文脈の構築を目指して問題を作成し、その妥当性を英語母語話者により確認した。さらに、測定対象となっている文法項目以外の点で、学習者がつまづかないように、文脈で用いる文では、未習の語句や文法項目が入らないように配慮した。

この文法テストの開発において、もう1つ配慮したのは、テストング・ポイントとなっている文法項目を含む部分が「定型言語(formulaic language)」であるかどうかである。定型言語は、時に「プレハブ言語(prefabricated language)」と呼ばれることもあるが、本稿では便宜的に前者に統一する。慣用法基盤学習(usage-based learning)モデルでは、学習者が出くわす特定の言語特徴の頻度と言語特徴が共起する頻度に力点を置いている(Ellis, 2002)。『特定の課題』では、これまで習得に時間がかかるとされてきた受動態の正答率が非常に高かった。しかし、これは調べてみると、The book was written by ... という多くの検定教科書で頻出している形で問うたためと考えられる。つまり、「受動態」が習得されたと考えるよりは、この特定の定型言語が身につけていたと考えた方がよいだろう。

したがって、今回の文法テストでは、同一の文法項目について、「定型使用(B問題)」と「非定型使用(A問題)」を求める問題を作成した。「定型使用」と「非定型使用」の判断は、微妙なものもあり、容易ではないが、本研究では、学習者が使用してきた英語検定教科書のデータベースを作り、そこに出てきているものは定型と判断し、それ以外は非定型と判断した。その理由は、本研究の参加者である日本人学習者の英語学習環境を考慮した場合、英語検定教科書以外のインプットはそれほど多いとは考えられず、自然言語コーパスをベースにした頻度よりは、英語検定教科書における頻度を参照すべきと考えたためである。なお、この文法問題は、作文がすべて終わった後実施し、定型言語の知識が非定型言語の問題の解答に与えないように「A問題→B問題」の順で実施した(表1参照)。

調査対象とした文法項目は、先行研究に基づき、日本の中学・高校生の習得にばらつきのあることがわかっているものとした。具体的には、現在進行形、過去形、be going to, will, 現在完了、受動態、because による副詞節、第4文型、第5文型、関係代名詞(who)、仮定法過去の11項目である。

表1 PK-Test の問題構成

問題番号	テスト・ポイント	正答例
A01	過去形	stayed up late
A02	現在完了	has already started
A03	関係代名詞(who)	a boy who speaks Japanese
A04	because	went home because she felt sick
A05	現在進行形	is talking
A06	be going to	is going to come
A07	仮定法過去	If it were [was] sunny, I would [could] take a walk
A08	will	will come
A09	第5文型	called him
A10	第4文型	give him some milk
A11	受動態	are used
B01	will	will help you
B02	第5文型	makes me happy
B03	because	like summer because I [we] can swim
B04	第4文型	show me your notebook
B05	受動態	is spoken
B06	現在完了	have cleaned
B07	be going to	am going to visit
B08	仮定法過去	If I had more money, I would [could] buy it
B09	現在進行形	am cooking
B10	過去形	watched his game
B11	関係代名詞(who)	a friend who plays the guitar

本研究の目的は、文法の手続き的知識を測るための文法テストの開発である。そこで、今回考案した PK-Test の妥当性を検証し、また、定型性の項目困難度への影響を調べるために、以下の研究設問を設定した。

研究設問

1. 新型文法テストの解答結果は、作文における当該文法項目の出現と一致するか。
2. 新型文法テストにおいては、非定型項目の方が定型項目より項目困難度が高いか。

3. 研究

3.1 研究の方法

3.1.1 実施手順

1. 3つの課題による英作文を書かせる。英作文を文法テストの前に書かせるのは、文法テストによって、本来手続き的知識になっていない文法項目が一時的に呼び起こ

されるような影響を避けるためである。

2. 同一の学習者に文法テストを A 問題→ B 問題の順で受けさせる。

3.1.2 参加者

作文は、ある県の県立中等教育学校の高校1・2・3年生(計290人)、文法テストは、中学3年生、高校1・2・3年生(高校生は作文の参加者とほぼ同一)(計394人)である。

3.1.3 研究ツール

文法テストは、上述の PK-Test である。これに対して、作文は、「私の大切な人」、「昨年度の学校生活について(よかったこと・よくなかったこと)」、「高校生はアルバイトをするべきである(賛成・反対)」というトピックによるものである。作文に与えた時間は、プランニングを含めてそれぞれ40分である。実施に当たっては、順序効果を相殺するために、20名前後のグループに分けてカウンターバランスを行った。

3.1.4 分析

文法テストそのものの分析においては、A 問題・B 問題のどちらも解答している学習者のみの解答を分析対象とした。作文と文法テストの分析においては、作文・A 問題・B 問題のすべてに解答している学習者のみの解答を分析対象とした。

文法テストの採点では、正解を1、不正解を0として採点した。この採点に当たっては、テストング・ポイントとなっている文法項目の使用が正しくできていれば、それ以外の部分に誤用や綴りミスなどがあっても、不正解とはしなかった。例えば、第5文型のテストでは、It is makes me happy. は、is makes の部分は間違っているが、テストング・ポイントの第5文型「主語＋動詞＋目的語＋補語」についてはできているので、正解とした。

項目困難度の推定には、項目応答理論を用いた。また、それぞれの対応する文法項目の A 問題と B 問題の正答率の差の検定には、 t 検定を用いた。

作文の分析では、文法テストで扱った文法項目が、3つのタスクのいずれかで正用法として産出されていれば1とカウントし、使用が見られなければ0とした。そして、それぞれの使用・不使用の人数と、文法テストにおける同じ項目の正解・不正解の人数をクロス集計表にした。項目ごとにカイ二乗検定を行い、「文法テストに正解し、かつ作文で使用した人数」＋「文法テストに不正解で、かつ作文でも使用しなかった人数」の全参加者数に占める割合(文法テスト結果と作文使用状況の一致率)を求めた。

4. 結果

4.1 文法テストの結果

分析の対象は、欠損データのない受験者394名分である。平均は9.16、標準偏差は4.82、信頼性係数は.85である。

各項目の項目困難度は表2、A・B 問題の項目別正答率の差の検定(対応のあるサンプルの t 検定)の結果は、表3の通りである。

非定型テスト(A 問題)では、困難度の低い方から、現在進行形(-1.00)、過去形(-

0.95), 関係代名詞(who)(-0.18), 第4文型(-0.01), 第5文型(0.03), will(0.14), becauseによる副詞節(0.34), 現在完了(0.38), 受動態(0.67), be going to(1.58), 仮定法過去(3.45)であった。

表2 PK-Testの学年別正答率と項目困難度

テスト・ポイント	問題	正答率	正答率	正答率	正答率	正答率	困難度
	番号	中3	高1	高2	高3	全体	
現在進行形	A05	42.3	56.6	62.8	68.9	58.4	-1.00
	B09	51.3	55.8	77.0	81.1	66.8	-1.50
過去形	A01	51.3	54.9	60.2	62.2	57.4	-0.95
	B10	46.2	31.0	25.7	35.6	33.5	0.35
be going to	A06	9.0	10.6	15.9	26.7	15.5	1.58
	B07	23.1	40.7	49.6	70.0	46.4	-0.35
will	A08	30.8	34.5	38.9	44.4	37.3	0.14
	B01	16.7	31.0	29.2	24.4	26.1	0.80
現在完了	A02	11.5	31.0	45.1	38.9	33.0	0.38
	B06	14.1	23.0	36.3	51.1	31.5	0.47
受動態	A11	11.5	23.9	39.8	33.3	28.2	0.67
	B05	23.1	54.9	57.5	65.6	51.8	-0.64
becauseによる副詞節	A04	21.8	31.0	39.8	40.0	33.8	0.34
	B03	56.4	54.9	55.8	67.8	58.4	-1.00
第4文型	A10	33.3	36.3	45.1	44.4	40.1	-0.01
	B04	66.7	83.2	85.0	93.3	82.7	-2.69
第5文型	A09	35.9	34.5	44.2	42.2	39.3	0.03
	B02	39.7	83.2	81.4	85.6	74.6	-2.02
関係代名詞(who)	A03	0.0	51.3	46.9	65.6	43.1	-0.18
	B11	0.0	53.1	51.3	80.0	48.2	-0.45
仮定法過去	A07	0.0	0.0	2.7	10.0	3.0	3.45
	B08	0.0	1.8	7.1	18.9	6.9	2.58

表3 A・B問題の項目別正答率の差の検定

	A問題正答率	B問題正答率	N	t	p
過去形	57.4	33.5	394	7.25	.00 *
現在完了	33.0	31.5	394	0.58	.56
関係代名詞(who)	43.1	48.2	394	-2.34	.02 *
becauseによる副詞節	33.8	58.4	394	-9.45	.00 *
現在進行形	58.4	66.8	394	-3.26	.00 *
be going to	15.5	46.4	394	-11.82	.00 *
仮定法過去	3.0	6.9	394	-2.63	.01 *
will	37.3	26.1	394	3.90	.00 *
第5文型	39.3	74.6	394	-12.37	.00 *
第4文型	40.1	82.7	394	-15.29	.00 *
受動態	28.2	51.8	394	-9.53	.00 *

* $p < .05$

過去形・will・現在完了の3項目を除いた8項目で、ほぼすべての学年および全体における正答率は、定型の方が非定型より高く、困難度は定型の方が非定型より低い(ただし、現在完了は全体の正答率に有意な差がない)。また、文型の正答率は、定型の方が非定型よりかなり高く、困難度は低いことがわかる。

多くの文法項目では、学年が上がるにつれ、正答率は上がり、困難度は下がる傾向にある。とりわけ、現在進行形・be going to・仮定法過去は、定型・非定型ともに、学年が上がるにつれ、正答率は上がり、困難度は下がっている。

4.2 英作文テストと文法テストのクロス分析の結果

カイ二乗検定の結果、A問題の「現在進行形」、B問題の「現在進行形」「過去形」以外は、文法テストの正誤と作文の使用・不使用に関連性が認められた。一致率については、B問題の「第5文型」「第4文型」「過去形」以外は50%を超えた。また、文法テストと作文タスクに見る文法知識の検定による関連性と、一致率、すなわち「文法テストが文法項目の手続き的知識(作文での使用状況)を予測できる可能性」を総合的に観察するために、項目ごとにカイ二乗値(X^2)の順位と一致率の順位を求め、その和が小さい順に並べかえた。表4がその結果である。

表4 英作文テストと文法テストのクロス分析

問題番号	文法項目	N	X^2 (df1)	p	一致率	X^2 順位	一致率 順位	順位和
B08	仮定法過去	290	39.49	.00 *	89.0%	1	2	3
A07	仮定法過去	290	31.08	.00 *	90.3%	5	1	6
A02	現在完了	290	35.57	.00 *	69.3%	2	5	7
A11	受動態	290	34.49	.00 *	70.3%	3	4	7
B06	現在完了	290	27.27	.00 *	67.6%	7	6	13
B03	because	290	31.30	.00 *	64.1%	4	10	14
A04	because	290	22.21	.00 *	65.2%	8	8	16
B11	関係代名詞(who)	290	29.72	.00 *	60.0%	6	11	17
A10	第4文型	290	21.31	.00 *	65.2%	9	8	17
A01	過去形	290	20.69	.00 *	66.2%	10	7	17
A06	be going to	290	11.90	.00 *	80.0%	14	3	17
A03	関係代名詞(who)	290	17.51	.00 *	59.0%	11	13	24
B05	受動態	290	12.69	.00 *	56.6%	13	15	28
B07	be going to	290	14.43	.00 *	53.4%	12	17	29
A08	will	290	9.42	.00 *	57.9%	16	14	30
A09	第5文型	290	4.90	.03 *	59.7%	19	12	31
B01	will	290	8.96	.00 *	56.2%	17	16	33
B02	第5文型	290	10.34	.00 *	41.4%	15	20	35
A05	現在進行形	290	2.71	.10	53.4%	20	17	37
B04	第4文型	290	4.96	.03 *	40.7%	18	21	39
B09	現在進行形	290	0.50	.48	50.0%	22	19	41
B10	過去形	290	0.91	.34	35.9%	21	22	43

* $p < .05$

5. 考察と示唆

5.1 考察

PK-Test は、作文における使用実態をかなりの程度反映していると思われる。作文においては、タスクの遂行のために、学習者自身が判断して、特定の文法項目を使ってくる。今回開発した PK-Test が作文における使用実態をかなりの程度反映しているのは、このテストが、どういう文法項目を使うかを自分で判断することを求めているためと考えられる。逆に言えば、そうしたプロセスを含まないテストでは、実際の使用能力を見ることはできないということだろう。

ただし、PK-Test では、使うべき文脈や語句がテストにより既定されているために、その特定の文脈や語句が学習者の使用実態と合っていない、または、それらになじみがないという場合は、テスト結果と実際の使用状況にずれが出る可能性がある。例えば、B10がA01よりも困難度が高かったのは、watched his game 自体の難しさというよりは、文脈の理解が困難度を上げてしまったと言えるだろう。

A01. (Mary が父親の Chris と朝のあいさつをします。)

Mary: Good morning, Dad.

Chris: Good morning, Mary. You look sleepy.

Mary: Oh, I _____ last night.
(stay up / late)

Chris: Maybe you should go to bed early tonight.

B10. (Ken と Tom が、Tom の部屋で話しています。)

Ken: Wow! You have an Ichiro uniform! Do you like him?

Tom: Yeah. I _____ in New York. It was great.
(watch his game)

ここでは、その後続く It was great. という文から、「it が指す内容が過去の1つのイベントである」と判断して、過去形が選択されなければならないが、前からの流れで、現在完了が選択されてしまった可能性がある。したがって、こうした項目は、今後の改善が必要であろう。

過去形同様に定型と非定型が逆転している will は、A08が単純未来であったのに対して、B01がその場での判断を表すもの(Oh, I'll help you.)であり、産出としては学習者にはなじみがなかったのかもしれない。

非定型テスト(A 問題)における困難度は、多くの項目で第二言語習得研究の習得順序の結果と一致していると思われるが、関係代名詞(who)は困難度が低すぎ、その一方で、will, be going toなどは困難度高すぎたかもしれない。関係代名詞(who)は、作文ではなかなか使ってこないものの、今回テストしたような形であれば、日本人学習者でも使えるのかもしれない。will と be going to は、その区別となると意外と学習者にはやっかいであり、また、will の用法のうち、意志未来は定着により時間がかかると考えられる。

全体としては、定型の方が非定型よりも正答率が高く、困難度は低かった。これは、文法事項の習得が単に黒か白かというようには決められないということ、また、定型言語の形での習得が非定型言語より先行していることを物語っている。とりわけ、定型言語の文型の正答率が、非定型言語よりかなり高かったのは、次に詳述するように、文型の定着というより、特定の単語の連鎖の定着と見た方がいいかもしれない。さらに、現在完了は、定型言語では学年が上がるにつれ一貫して正答率が上がり続けているが、非定型言語の方で、高2まで上昇してから高3で下降している。これは、意味と言語形式を文脈に合わせて判断する要素の強い非定型テストにおいては、学習段階が進むにつれて他の時制に関する意識がより高まることで、それらの時制との区別が必要となり、現在完了の選択がかえって困難になるためと考えられる。つまり、ある文法知識が他の文法知識に働きかけ、その変容を迫っているということだ。

英作文の分析については、順位和を見ると、17 (B11, A10, A01, A06)と24 (A03)の間に一線を引くことができるかもしれない。順位和17までの一致率は60%を超えており、これら11項目についてのPK-Testは、作文に現れるそれらの文法項目のおおよその手続き的知識を予見することができると言ってよいだろう。作文での使用は、定型言語かそうでないかは区別していないが、例えば第5文型の使用状況について詳しく調べてみると、82の使用件数のうち、make + 目的語 + happy が48件(58.5%)を占めている。さらにそのうちの半数以上が makes me happy(16件)、make me happy(10件)のような、教科書にあるそのままの形(Her song makes me happy.)を使用しており、*They makes me happy.のような誤用も散見される。また、少し言語操作を加えた make(s) + me 以外の目的語 + happy が8件、made me happy が12件、made + me 以外の目的語 + happy が2件見られた。やはり項目によっては、品詞の組み合わせというよりも、教科書で触れた形をチャンクとして記憶していて、過剰使用も含めてそのまま使ってしまうか、少しの操作を加えられる程度の知識にとどまっているものもあるかもしれない。

5.2 示唆

言語処理においては、長期記憶に蓄えられた定型言語があるおかげで、単語をその場で文法的に構築していくことをせずにすんでいる、と Conklin and Schmitt(2012)は述べている。このように、定型言語というものも、創造的な言語産出のために、母語話者であれ非母語話者であれ、必須のリソースかもしれない。非母語話者でも、熟達度のとても高い非母語話者であれば、母語話者同様の処理を行うが、熟達度の低い非母語話者は、しばしば非定型言語と同じように、定型言語も一語一語処理しているということがわかってきている。したがって、定型言語の使用自体もあるステージへの到達を表していると言えるだろう。これを言語能力評価という観点から言えば、産出された言語がどちらのものか区別して扱わなければならないことになる。

従来の定期試験では、学習の直後の成果だけを見てきているが、学習者がある文法事項を学習した後、その知識がどう変容しているのかを見ていく必要があるだろう。そこで、定期試験では、少なくとも知識の変容が起こっていると考えられる文法項目や日本人英語学習者がこれまでに習得上困難をきたしていると考えられる文法項目を学習したときには、

今回開発した PK-Test などを用いて、学習の達成状況を把握していくことが重要であろう。

6. 結論

新型文法テストの結果は、作文における当該文法項目の出現と、多くの項目において高い一致を示した。また、同じ文法項目でも、非定型項目の方が定型項目より項目困難度が一般に高かった。こうしたことから、新型文法テストは、文法項目の潜在的な使用能力としての手続き的知識をかなりの程度予測できると言えるだろう。

ただし、今回の調査の限界もある。今回は、3つの異なった作文を見ることで、学習者の文法項目の使用実態を知ろうとしているが、これが十分に包括的であったかどうかはわからない。特に仮定法過去などは、もう少し非現実の話を書かせるようなタスクであれば、今回よりは使ってきた可能性がある。また、テストに用いる語句も、教科書に1度でも出ていれば定型言語として定着しているとは、必ずしも考えられないだろう。さらに、従来型文法テスト DK-Test と今回開発した PK-Test の出来を直接比較することなども、今後行っていく必要があるだろう。

参考文献

- Conklin, K., & Schmitt, N. (2012). The processing of formulaic language. *Annual Review of Applied Linguistics*, 32, 45-61.
- DeKeyser, R. M. (2001). Automaticity and automatization. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and Second Language Instruction* (pp. 125-151). Cambridge: Cambridge University Press.
- DeKeyser, R. M. (2007). Introduction: Situating the concept of practice. In R. M. DeKeyser (Ed.), *Practice in a Second Language: Perspectives from Applied Linguistics and Cognitive Psychology* (pp. 1-18). Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, N. C. (2002). Frequency effects in language acquisition: A review with implications for theories of implicit and explicit language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 143-188.
- Hawkins, J. A., & Buxton, P. (2009). Using learner language from corpora to profile levels of proficiency: Insights from the English Profile Programme. In L. Taylor & C. J. Weir (Eds.), *Language Testing Matters: Investigating the wider social and educational impact of assessment* (pp. 158-175). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (2013). *How Languages are Learned 4th edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Salamoura, A., & Saville, N. (2009). Criterial features across the CEFR levels: Evidence from the English Profile Programme. *Research Notes*, 37, 34-40.
- Salamoura, A., & Saville, N. (2010). Exemplifying the CEFR: criterial features of written learner English from the English Profile Programme. In I. Bartning, M. Martin & I. Vedder (Eds.), *Communicative Proficiency and Linguistic Development:*

- Intersections between SLA and language testing research* (pp. 101-132). Eurosla.
- 国立教育政策研究所 2012.『特定の課題に関する調査(英語:「書くこと」)』
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_eigo_2/index.html [2014年1月]
- 根岸雅史 2011.「文法テストはこのままでよいのか」『日本言語文化研究会論集』第7号, pp.1-15.
- 根岸雅史 2012.「CEFR 基準特性に基づくチェックリスト方式による英作文の採点可能性」
『ARCLE REVIEW』No.6, pp.80-89. Action Research Center for Language Education.
- 村越亮治 2012.「日本人高校生英語学習者の英作文に見る文法特性」『ARCLE REVIEW』
No.6, pp.90-99. Action Research Center for Language Education.
- 村越亮治 2013.「日本人高校生英語学習者の英作文に見る文法特性の発達」『ARCLE REVIEW』
No.7, pp.24-33. Action Research Center for Language Education.